



正副会長の活動状況

— 会務報告 —

日本弁理士会副会長

正林 真之

自ら可能性を狭める者に、未来は無い

今の弁理士の総数が約1万1千人として、現在の特許出願や商標登録出願、意匠登録出願で賄える弁理士数というのは、だいたい5千5百人程度ではないだろうか。つまり、特許出願が年間約30万件で、弁理士一人当たりで年間50件を割り当てるとすれば約6千人。ただし、非代理を勘案すれば、2割を差し引いて約5千人というところである。そこに、意匠と商標の案件を割り振って約5百人を足せば、だいたい約5千5百人ということになる。

そこに企業内弁理士の2千5百人を足して、約8千人。これが今の弁理士の” 食い扶持” を考慮した適正人数だとすれば、これを1万1千人から引いた約3千人の弁理士があぶれてしまっているというのが現状である。この3千人を喰わせるには、どうしたらよいか。

もちろんそのために「出願件数を増加させる」というのもあるであろう。けれども、弁理士の食い扶持のために、しなくてもよい出願を勧めることになるのは、本当に問題である。

だとすれば、せっかく法改正もなされ、弁理士の活躍が期待されている新領域に果敢に挑戦することが、我々の未来のために、そして我が国の未来のためには大いに必要なのではないだろうか。

このように私自身が考えているからなのか、私自身は、そういった新領域に関する委員会を担当することが多い。

[ADR 推進機構]

今のところ、「新サービス」としてホットなのは、著作権、標準、営業秘密管理、データ管理、ADR（裁判外仲裁）と、そういったものだろう。まず、ADRについては、ADR法によって、知的財産関係の事件についての裁判外の仲裁を扱うことができる。この

ADRによれば、裁判ではどうしても乗り越えられない“壁”を乗り越えることができる。それは「国境を越えた仲裁」である。最近になって注目されている国際仲裁を上手く行えるようになれば、弁理士としてやりがいの有る仕事が増えるだけではなく、国際紛争に悩む日本企業を救うことができるだろう。

[著作権委員会]

昨年の委員会では、それまでの判例研究中心の活動を刷新して、「弁理士が関与できる著作権業務」を中心とした活動に切り替えた。これにより、弁理士が関与できそうな業務の抽出がなされ、それらの業務を実務レベルにまで落とし込んでいくことになった。実際、著者不明の著作物の使用を促進するためのオープンワークスや、著作物の登録業務のサポート、一般的な相談といったような具体的な活動内容が提示され、その実行を行う準備段階にまで来ている。

[技術標準委員会]

「標準」と「データ管理」については、本年度の弁理士法改正によって弁理士の標榜業務となった分野である。「標準」については、昨今の知財戦略の中でも重要とされている「オープン・クローズド戦略」において、無くてはならない戦略の一つである。これについては、技術標準委員会において、日本規格協会（JSA）や日本品質保証機構（JQA）とも協調しながら、標準についての基礎知識を会員に周知化することとしている。実際の実務に携わることによる経験値の獲得については、関東経産局を初めとする各地方の経産局からの要望に応え、そこに委員を派遣することから始めている。

[知的財産支援センター]

知的財産支援センターによる支援は、関東、東海、

および関西以外の地域において行くとされている。関東、東海、および関西の地域は、自前で知財支援を行うというわけである。しかし、各地方自治体や公益団体等と締結される知的財産支援協定等、知財支援の基本骨格を決めるのはこの知的財産支援センターである。そうした中であって、最近になって課題として挙がってきているのは、「知的財産支援」って、いったい何なのだろうか?!」ということである。「まさか、セミナーと無料相談だけが“支援”だって思っていないよね?!」というのがその裏にある。

センター設立 20 周年を迎え、盛大なる記念パーティーも行われたが、「支援」って、いったい何なのか?!」は、我々に突き付けられた鋭い課題である。むしろ、資力の乏しい者に対して出願支援を行うのも支援であるかもしれない。けれども、それは本当に支援になっているのか。かえって負荷や負担を負わせただけではいけないのか。我々が考えるべきことは深い。

とはいえ、セミナーと無料相談だけが支援ではないものの、セミナーと無料相談はやはり重要である。本年度は、小学校や中学校よりも、知財支援についての要請がより強い少年少女発明クラブ等への団体に対して、金銭的な面も含め（通称、羽鳥亘基金）、支援を開始している。また、高等専門学校に対しては、IPCC からの要請を受けて知財授業が行われるようになった。

[知的財産経営センター]

「もう出願権利化業務だけでは、やっていけない」という声がかつだんと大きくなっていく昨今の状況下であって、アウトソーシング業務中心の現業からコンサルティング業務への移行を狙って、JPAA 知財経営コンサルタントなるものも創設されることとなった。

けれども、「そもそも他人の経営を云々言う以前に、自分の経営はどうなのよ?!」と言われてしまうことも多く、それはまさに我々の喉元に突き付けられた剣先のようなものである。このようなことから「まずは自分の経営から」ということで、まずは自分の経営を良くしてから、その経験をもってして他社にあたる、ということ強く推奨している。

もとより、自らの知的資産に基づいて経営をしているのは、我々弁理士自身である。我々弁理士がきちんとした知的資産経営をすることによってのみ、そしてそれがくまなく実現されることによってのみ、本当の知的資産経営が実現し、JPAA 知財経営コンサルタン

トの称号も光輝くようになってくるのだと思う。

この一方で、知的財産をうまく活用した者とそれを巧みにサポートした者を表彰するのが、知的財産活用表彰（通称、古谷史旺表彰）である。あらゆる機関に先立って活用者を積極的に表彰する本制度は、創設から既に 6 年を経過するものとなっているが、その重要性は益々高まるばかりである。

[関東会]

関東会は、今さらここで言うまでもなく全国で最大の地域会であり、約 8000 人もの会員を抱えている。今年度は、関東会として初めて地方自治体（町田市）と知財支援協定を締結するに至った。

今後は、やはり関東に位置する日本弁理士会本会との業務の棲み分けや、東京以外の地域との調整が大きな課題として残っている。

[経営デザインシート・ローカルベンチマーク作成 WG]

内閣府から提唱された経営デザインシートやローカルベンチマークについて、これらを上手くコンサルティングツールとして使うというのが、各士業の流れであり、内閣府の意図の一つでもある。税理士業界では、これらが業務の一つとして取り込まれ、ローカルベンチマーク作成のためのシステムまでもが出来上がっている。

けれども、弁理士会のほうでは、研究とお勉強会だけをただ繰り返すだけで、「現物」としての成果は全く出ていなかったのである。こうしたことから、経営デザインシートやローカルベンチマークを実際に作成する WG として設置されたわけであるが、その成果として、年度初めに早々と、日本弁理士会独自の経営デザインシートというものが、士業としては初めて、内閣府の HP に掲載されることとなった。

[知財総合支援窓口対応 WG]

INPIT（独立行政法人 工業所有権情報・研修館）が運営する知財総合支援窓口において、ここで対応業務を行う弁理士を選定する委員会であり、INPIT とは定期的に話し合いをしながら、より良い運営ができるようにしている。ケースとしては、大変に上手くいっているものと、誠に残念ながらそうではないものがある。こうしたミスマッチを低減していくことが課題である。

冒頭では、弁理士の総数は約1万1千人、企業内弁理士は約2千5百人と言ったが、実はこれは正しくない。なぜならば、企業のほうで会費を出してくれないなどの理由で、折角試験に合格しながらも弁理士登録できない方々が存在するのである。その数は約1千人とも言われている。これほどまでにこの業界の状況は深刻である。

今のような変化の多い時代において、古くからの人間の言うことなど、殆どあてにならない。それは、いくら図体が大きく、力が強いからといって、白亜紀の末期に哺乳動物が恐竜に「生きる術」を聞くことがなかったのと同じである。若手は若手で、自らが生き残るために考え、実行していけばよい。一弁理士という個人的な立場であればもちろんであるが、副会長という公職の立場としても、そう思う。

このようなわけであるから、「昔は、こうだった」とか、「従来からのやり方は、こうだ」といったようなことは、もうやめたらどうだろうか。むしろ、しなければならぬのは、過去に縛られずに、自らの可能

性を広げることである。何となれば、自らの未来というものは、自らが自らの力で作っていくものだからである。

Change! Before you have to.
変革せよ。変革を迫られる前に。

Face reality as it is, not as it was or as you wish it to be.

現実をありのままに受け入れなさい。過去の姿や願望は忘れるのです。

Before you are a leader, success is all about growing yourself. When you become a leader, success is all about growing others.

リーダーになる前の成功とは、自分自身を成長させることである。リーダーになったならば、成功とは他人を育てることである。

(いずれも Jack Welch の言葉)